41　浅田宗伯と清国駐日公使館の人たち

陳　捷

浅田宗伯の清国駐日公使館参賛官・黄遵憲との交遊については、すでに第九十七回総会で報告した。本稿では、宗伯と清国駐日公使及び公使館各員との交流について考察したい。

明治十三年五月出版の『温知医談』第十三号に、浅田宗伯は岸田吟香の上海からの来函を紹介して「此頃清公使館ニ患者アリテ請招セラレ、両大臣ニ筆話セシニ……」と、自分の清国公使館での見聞を述べている。『和漢医林新誌』第四十七・四十八号の漫録欄にも、宗伯が清国新任公使徐承祖氏の脚気を直したので公使から謝状を送られてきたことが記されている。これらの記録から、宗伯は清国公使館の診療を担当していたことが分かる。明治十八年、七十七才の浅田宗伯は『橘窓書影』跋文で自分の一生を振り返って「清国及朝鮮使節来我邦者、以受余診為例」と述べており、それに対する宗伯の誇りが窺うことができる。

『栗園遺稿』に収められている清国公使や公使館員宛の書簡や帰国時の送辞などによれば、浅田宗伯は度々彼らに自分著作への批正を願い、序文を頼んだことが分かる。知人や自分の家へ公使たちを誘ったり、友人のため、公使たちに揮毫してもらったりしたこともよくあったらしい。宗伯の名前は清国公使館が出版した『重九讌集詩』や『庚寅讌集三編』など詩文集にもよく見られ、公使館・上野精養軒や芝山紅葉館などで開かれた日中文人の宴集に度々列席して、詩文唱和に楽んだ様子が窺える。友人たちと清国公使館との交流の仲介役を働いたことは、宗伯と公使館の密接な関係を語っている。公使黎庶昌を送別する宴会の詩集に宗伯の送辞が第一篇に置かれた（『庚寅讌集三編』上『登高集』）ことも、公使館が宗伯のことをかなり重視したことを示している。一方、宗伯も時々清国公使館での見聞や、公使館の宴会で作った詩などを詳しく友人たちに報告しており、この付き合いを大事にし

ていたことが分かる。

『先哲医話』巻首の副公使張斯桂の序文では、ある公使館員の鼓脹に対して、宗伯が三・四回薬をあげただけで病気を直した例を引いて、彼の医術に対する称賛の情を述べている。また、宗伯が著述に富むことも外交官たちから尊敬された（『温知医談』第十三号宗伯引張斯桂筆話）。しかしながら、公使館の人たちが宗伯を尊重したのにはそれ以上の理由がある。宗伯について、初代公使何如璋は、「学問淵博、尤精於医。年近八十、神明不衰。与余交、味淡而意篤、東海高士也」（矢数氏蔵掛軸）と言っており、黎庶昌は、「精医学、生平篤宗仲景。雖今日西法大行而卓然守正、其術亦並行不悖、門徒且益盛不衰」と賛辞を述べている（「医説一首贈浅田宗伯」『拙尊園叢稿』巻五）。宗伯の医術とともに、その人徳と、西洋に傾いていた時代風潮の中に漢方の生存のために戦い続けた努力を高く評価している。それに対して、宗伯も欧米使節の「要利規商」、「祆教誘人」、「奇器欺俗」と違った何如璋の「本仁義、主廉恥、名教有所持立、而或文或武、不辱大邦之使命」（「送清欽差何公帰国序」）に敬意を表し、「徒知欧米事情、而不能審亜洲之先於万国」の日本外交官と比較して、「訪求聖賢逸書」、「集会我邦文学之士以罄同文之歓」などをした黎庶昌こそが「仁愛之士」だと感激している。これらの評論からも窺えるように、彼らの交友関係は、東アジア社会・文化に大きな衝撃を与えた西洋勢力に対する反発、共通的な社会認識と教養・感情に基づいたものであった。

公使館の人たちに、宗伯は清国の医療事情や医学界の現状などについて問い合わせたことがあり、日本社会の現実に対する宗伯の認識も公使館員たちに影響を与えていた。これらの交流は漢方復興運動を応援しただけではなく、近代日中知識人が日常的な接触により、互いの理解を深めた例の一つとしても大きな意味を持っている。

（東京大学人文社会系研究科／北里研究所東洋医学総合研究所
医史学研究部）